
あの願いをいま

快流緋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの願いをいま

【著者名】

Z59050

【あらすじ】

最期の願い。でも、それは叶えてあげたくても上げられないものだった。だから、せめてもの気持ちを。

【快流緋水】

私は何も言わず、ただただ静かに、そつと着物をかけてやつた。
1番お気に入りで、おしとやかに椿が散つている着物であった。

部屋の中は、人でいっぱいであった。久々に揃つたこの人数に、春さんはご機嫌であった。

『なんだか正月とお盆がいつぺんに来ちゃつたみたいねえ。』
確かに、そう思えるほどの集まりようであった。

『お母さんのために来たんだからね。何か欲しいものはある?』
春さんは顔をくしゃくしゃにしながら微笑み、首を振つた。
『永太郎さんにお願いしたから、もう何もいらないよお。』
隣に座つている旦那を見る目は優しい。それだけに、おしどり夫婦で羨ましがれていたのが分かる。

『お母さんつたら、一生のろけるのね。』

春さんはほほを少し赤くして微笑んだ。

『そりや1番好きだからねえ。』

私は涙を浮かべた目で春さんを見て、そつと手を繋いだ。
『ありがとよお。』

まだこんなに人数が集まらないうちに、春さんの願いを聞いていた。それは叶えたいどんなに願つても、叶えられないものであつた。それだけは春さんにも周りの人にも良くない。返答に詰まつた私を見て、春さんは首を軽く振つた。

『いいのよ、永太郎さん。』

そう言つて、春さんは微笑んだ。

『見せてやりたいが、それはなあ。』

言葉を濁すと、春さんは分かつていてと言つて、うづうづいた。

『そつのよね。じゃあ、手を繋いでいて下さいな。』

私はかすかに照れた。

『それでいいのか？』

『いいのよ。』

たくさんいた人も、数時間後にはいなくなっていた。あまりの人数では、周りに迷惑であるし、なにより春さんが家に帰したのだ。私たちはずっと手を繋ぎ、とりとめもない事を私が話していた。ポツリと沈黙が訪れる。

『寂しくないかい？』

小さな声でそう聞くと、春さんは何も言わず、ぽかんと口を少し開けて私を見上げた。

『椿が綺麗だねえ。』

ポツリと、消えそんなくらい小さな声で言つた言葉に、私は目を見開いた。

そして、その声は本当に消えてしまった。

眠るようにして、本当に2度と起きない眠りについた春さんのお葬式は、しつとりとした雨の中行われた。

『お父さん、寂しいわね。』

『そうだな。』

『ねえ、お母さんの欲しいものってなんだったの？』
ずずつと鼻をすすつた。

『これだよ。』

お棺の中で眠る春さんの上に掛けられた、椿の柄の着物。

『死ぬときには着せてつて？』

急に老け込んだ顔のまま首を振った。

『本当は椿を見たかったんだじゃ。だが、入院している者に花びと落ちるのはご法度。だから、ここに見せてあげるんじゃよ。』
そういうと、スースと涙が流れた。

『先がないとわかつっていたから、見せてやりたかったよ。だがね、

春さんは周りの人の迷惑だからって遠慮したんだ。』

『お母さんらしいわね。』

お棺の横にひざをつき、春の顔にそっと手を当てた。

『綺麗だな、春さん。お前の着物の椿、見えるか？綺麗だなあ。』

ほんの少し、春さんが微笑んだように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5905o/>

あの願いをいま

2010年10月30日16時40分発行